

# ブレヒトの初期の詩について

——「家庭用説教書」——

野村修

周知のように、サルトルはその「文學とは何か」のなかで、詩人はことばを「もの」としてとりあつかい、散文作家のようにことばを手段として利用することはない、と書いている。それにたいして散文作家は、ことばを手段として「指示し、説明し、命令し、質問し、歎願し、侮辱し、説得し、暗示する。」詩と散文をこのように區別する考えかたは、ヴァレリーのばあいにも見られるように、むろん綿密な思考を背後にもち、たしかに一面の眞理をとらえている。そして西歐あるいは日本の現代詩人の多くが、多かれ少かれこの考えかたを前提していることも、事實として否定することができない。にもかかわらず、もしいま、詩と散文とのこのような區別にもとづいて過去の詩を位置づけたり、今後の詩を方向づけたりしようとするならば、そのころみにはあきらかに缺陷があり、その缺陷はたんに詩なり散文なりを極度に抽象化して考えているために具體的な現實と密着しない、というだけにはとどまらない。なぜなら、サルトルの判斷は、かれ自身が明記しているとおり、象徴派から抵抗詩にいたるフランス詩の實狀から、歸納され抽出されたものである。すなわち、サルトルが詩に狀況變革のための参加をもとめないのは、フランス現代詩（これは日本の現代詩といいかえても、ほとんどさしつかえない）が、現に變革のための参加をみずから拒否してい

る、という事實を確認しているにすぎない。抵抗詩をもふくめて、ひとの情緒の組織を根柢から震撼し、あたらしい組織形態へ方向づけてゆくにたる、具體的に強力な詩が存在していない、といっているにすぎない。むろん、ぼくがこのようにサルトルを読み、ここでは現代詩じたいの變革が暗に要請されているのだ、と結論するならば、いちおうは誤讀であり曲解だろう。だがぼくには、サルトルが散文にたいして展開してゆく要求のひとつひとつが、詩にたいする要求となって、胸にこたえてくる。サルトルの區別は、はたしてただしいだろうか。たとえばかれは言う、散文作家は「狀況を變えようとする企圖をつうじ、語ることに於いて、狀況を曝露する。狀況を變えるために、それを自身および他人にたいして曝露する」と。そして詩人のばあいは、たとえ散文作家とおなじ企圖から發言しても、發言が詩となれば、詩は存在となって、手段としては作用しないのだと。さらに「もし詩人がものがたり、説明し、教えるならば、詩は散文的となり、詩人はその勝負をうしなう。そのときに問題となるのは、不純だがよく限定された複雑な構造だからである」と。そう言いきっていいのだろうか。おそらく、サルトルの視野は、詩に關しても具體的であり、現代詩の性格をするどくえぐりだしているとはいえるだろう。しかしその現代詩は、きょうあるいはあすにもとめられている詩ではなく、きのうの（殘念ながら、きょうの、でもあるようだが）フランスに現象していた詩であるにすぎない。サルトルの發言は、詩にたいするばあいは、散文にたいするばあいというらはらに、（もしそれを反語にとらぬなら）奇妙に文學史家ふうであり、創造性をもたない。

ところで、ぼくがまずサルトルにこだわったのは、かれの發言が多くの詩人たちに聞かれてゐるからばかりでなく、かれの簡潔で明晰な詩論は、いまドイツにおいて影響力のおおきいベンの輓晦にみちた詩論と、根本においてかなりあうからであり、さらにその詩論に立脚する詩が、これから見てゆくブレヒトの詩と、あざやかな對照をしめすからである。一九三四年、亡命の當初に、ブレヒトは「眞實を書くにあつたの五つの困難」という具體的な方法

論を書いているが、そのはじめにはこう書かれている——「こんにち嘘偽や無知とたたかって眞實を書くとする者は、少くとも五つの困難を克服せねばならぬ。かれは、眞實を書く勇氣をもたねばならぬ、眞實はいたるところで壓迫されているけれども。眞實を認識する智慧をもたねばならぬ、眞實はいたるところでおおいかくされているけれども。眞實を有効な武器に轉化する技術を、眞實を有効に用いるひとびとを讀者にえらびとる判断を、さらに、これらのひとびとの間に眞實をひろめるための策略を、かれはもたねばならぬ。」（むろん「眞實」は、包括的な眞理にかぎらず、部分的な眞實もあり、眞實の發見にみちびく「證據物件」もある。そして、そのそれぞれに用法がある。）

この重要なエッセイの検討はいまはしないが、右のプログラムからだけでも、文學にたいしてプレヒトがいくつ要求が、散文にたいするサルトルの要求とはば一致することは、了解されると思う。しかしプレヒトにあつては、要求の向けられる對象は散文だけではない。詩も劇作もふくまれる。詩も劇作も、眞實をあばき、眞實をつたえ、ひとびとの情緒を有効な認識の方向へ組織してゆく手段であり、武器である。詩と散文とに區別があるとすれば、それはいわばおのおのが形のちがう武器だということだ。したがって製作のための技術もちがえば、傳達のための策略もちがう。讀者のがわから言え使用法もちがうだろう。しかし有効な武器として「讀者の用に供される」ことにおいては、ちがいはない。（このことは、むろん文學からたのしみを排除することにはならない。文學は、たのしまれるものでなくては、もともと有効ではないのだから）おそらく、詩は、政治状況の變革に直接にやくだつプロパガンダの機能はもたぬばあいにも、政治状況とふかく聯關する情緒の組織状況に（政治状況をも利用しながら）はたらきかけ、それを曝露あるいは變革することに、散文とならんで、やくだつはずだし、やくだたせられねばならない。このことは、詩はことばで書かれるという、自明の事實にもとづく。むろん、象徴派以後のいわゆる純粹詩への志向の背後にも（たとえばベンのばあいにも）おなじ自明の事實があるのは、周知のとおりだ。ただ、ことばに手段としての實用性と存在としての呪術性とのふたつの機能を區別して、そのいずれかを生かし、いずれかを殺してゆくことを

意志するとき、たとえばブレヒトとベンとの道がわかる。(加藤周一は、ベンにふれて書いたとき、このことを「自我から出發するか、他人か社會から出發するかは、合理的思考の範圍の問題ではなく、偶然の、または運命の、または不合理の、體驗の問題である。他人ははじめからあるか、最後までないか、どちらかである」と言いあらわした。ここに岐れ道が見いだされるのはたしかだが、そこでの選擇を運命の問題にしてしまうのは、あまりにも粗雑だろう。といって、いまばくがうまく言えるわけではないが。)ブレヒトの道は、ベンのように呪術性に最大の信を置くのでもなく、サルトルのように呪術性と實用性を詩と散文に配分してしまふのでもなく、詩においても散文においても實用性を生かしてゆくこと、ことばの理性的な具體的な部分を有効に用いてゆくこと、にあった。そしてその道は、サルトルの斷言にもかかわらず、けっして詩の死へみちびきはしなかったと思われる。

ブレヒトの最初の詩集「家庭用説教書」は、一九二六年に私家版としてつくられた「携帯用説教書」にわずかな變更が加えられたもので、二七年に公刊された。個々の詩の成立は一九一六―二六年のあいだである。當時の状況をかんとくに素描しておきたいが、ぼくはまだあまり資料を勉強していないので、いまは不十分なことしか書けない。ともかく、ブレヒトは一八九八年にアウグスブルクに生まれ、大戰のころ大學にすすんで醫學をまなんだ。衛生兵として陸軍病院に勤務し、戰爭による人間の不具化を見、ロシア革命の報を聞き、やがて敗戦のドイツに革命が反映するのを體驗した。後年の回想によれば、かれは「アウグスブルク陸軍病院の衛生兵だった。兵營も、病院さえもからっぽになり、町はたちまち、貧民街からあふれてくる新しい人間の大量でいっぱいになった。異常な活氣がみなぎっていた。すぐさま結成された協議會で、労働者の妻たちが、復員してきた若い労働者たちを激勵した。工場は労働者の管理下にはいった。數日だった、だがなんという數日だったことか、いたるところに闘士たちがいた、だがかれらは同時に、平和な、建設的なひとびとだった。」この數日のあいだ、ブレヒトは協議會(ソヴィエト)に兵士委員

のひとりとして加わり、當時の知識層の多數とおなじくUSPDを支持したという。しかし一九年一月のベルリンにおけるスバルタクスの敗北を轉機に、反革命の時期はやくもはじまる。同年四月にはミュンヘンの左翼勢力が壊滅した。當時、共和國の政治權力をにぎっていたのは、かつて戦時には戦争を支持したSPDだが、これは革命的な勢力ではなく、改良主義的であり、革命期をすみやかに終らせることをのぞんでいて、ボルシェヴィズムに反対したのみならず、經濟面の根本的な改革には手をつけず、軍の民主化にも手をそめなかった。進行するインフレーションによって、ビッグ・ビジネスの經濟支配力は増大するいつぼうだったし、革命によってつくられた（ノ）軍は、勞働階級に公然と敵意をしめしていた。二〇年三月の右翼の叛亂、いわゆるカップ・ブツチュは、強力なゼネ・ストによって敗退させられ、勞働階級こそが信頼するにたるデモクラシーの支柱であることが證明されたにもかかわらず、政府は、この機を利用して民主化を確立することの代りに、民主化を要求してゼネ・ストを續行していたルウル地方の勞働者に、いま叛亂したばかりの軍をさしむけ、法と秩序の名のもとに勞働運動を彈壓した。勞働者は敗北した。しかしSPDも支持をうしなつた。二〇年六月の選舉の結果、SPDは政權をうしない、以後二八年まで、二度のみじかい期間をのぞき、（名目だけでも）社會主義の政黨はヴァイマル共和國の政府のそとがわにとどまることとなる。共和國の實權をにぎつたのはビッグ・ビジネスであった。とはいえ、二一年から二三年にかけて、通貨の完全な崩壊を背景に、もういちど革命的狀況がおとずればした。しかしKPD（USPDは二〇年末に分裂し、右派はSPDに、左派はKPDに合流していた）が、その狀況を利用しえないでいるうちに、尨大な外國資本の流入によって通貨が安定し（二三―二四年）、革命的狀況は消えうせた。政治的な安定がそれにつづいた。二五年以後、大恐慌まで、共和國は、E・ヴァイネルトの表現をかりれば、「お行儀のいい女の子」だった。ブレヒトの「説教書」は、だから、このお行儀のいい女の子のまえにさしだされたわけである。ところで、もしこの女の子の書棚に新刊の詩集がならべられていたとすれば、そこにもっとも多く見られたものは、おそらく退潮しゆく表現主義の饒舌だっただろう。たかく

いたましく、さわがしくひびく観念的な「精神」の叫びの洪水は、すでに二〇年にK・ピントゥスによってその使命を終えたものとみなされていたものの、なお左から右までのいたるところに氾濫していたろうから。しかし「安定期」には、それはもう有効ではない。一方では孤獨な「精神」の作業が、ますます精密の度を加えていた、たとえばベンの書齋のなかで。また一方ではいわゆる即物的なものの復権が表面的にくわだてられていた、ノイエ・ザハリヒカイトという商標を用意して。だが他方では、ヴァイネルトの政治的な歌ごえがキャバレエからひびいていたし、ベツヒアのアたらしい聲が印刷されていた——かれは「いわゆる表現主義のケイレン性疾患」から脱却して、はっきり革命的プロレタリアートのがわに立ち、「前衛として、よりよい（藝術的）装備を手にいれ、（藝術的）諸手段をより適確に使用してゆくだろう」と（二四年）。ブレヒト自身についていえば、かれはまだ（おそらく二七年ごろまでは）コミュニストではなかった。この時期の作品としては、「説教書」にまとめられた詩のほかに、劇作「パール」「夜の太鼓」「都市のジャングルのなかで」「エンドワアド二世」「員數は員數」などが数えられる。

初期のブレヒトについて、かれが表現主義者だったとか、ではなかったとか言われているが、その言いかた自体は、高原宏平（「初期のブレヒトにかんする覺書」報告六號。ほくの試論は、たいへんこの論文のおかけをこうむっている。そのなかにW・ペンヤミンによる「説教書」の簡潔で適確な解説が紹介されている。参照しておいてほしい）も示唆しているように、たいした問題ではない。問題になるのは、ブレヒトの表現主義へのかかわりかたである。たとえばベンにとっては、ベン自身が表現主義の一翼になって登場してきたことは、いわば（加藤周一ふうにいえば）運命にすぎなかった。表現主義といわれる刻下の現象は、かれの本質的存在とはかかわりなく外部にあるものであり、かれの内部の自我の成熟とは偶然の關係しかなかった。少くとも一九二〇年以後、かれは意識して外部とのかかわりを断ち切ったように思われる。しかしブレヒトはそうでなかった。おそらくブレヒトは、孤立的な

表現主義詩人より、あるいは表現主義をくいのにする時評家などより、はるかに積極的に、表現主義とかかわりあっていたといえる。かれの後年のことばを借りれば、かれは表現主義を、「非現實的な、みせかけだけの解決」でごまかすもの、「善なる人間たちなどというせんぜんあやしげな、てんで効果のない集合概念」をでっちあげるものとみなしていた。そんなものは、自然科学をまなび、大戦の現實にふれたかれには、なんのやくにもたたぬものだった。むろんこの理解には、あるていど時代の流れもつだっていたよう。W・イエンスによれば、一九一四年には新鮮だった表現が、二二年には陳腐な常套句と化していた、という。ブレヒトはこのすでに陳腐なものを利用し、逆用したのだ。かれの初期の作品はほとんど、表現主義のパロディとして讀むことができる。かれのことばの内容は徹底して具體的な曝露なのだが、言いかたのはしばし（ヴォキャブラリーとか）や對象のえらびかたには、あきらかに表現主義を思いださせるものがある。かれは、一見したところは表現主義と共通する手段を用いて、ときには意識的におおげさに用いて、表現主義のひたむきな熱狂的なアイデアリズムとはうらはらの、つめたい、しらじらしい、ばかばかしいほど機械的な、唯物的な世界のすがたをひきずりだしてみせた。このばあい、假面をひきはがされるのは、むろん文學上の表現主義に限定されはしない、頽廢を露呈しはじめていた市民社會そのものである。いやむしろ、市民社會そのものの頽廢を曝露し嘲笑することが、ブレヒトの直接の意圖だったかもしれない。「説教書」をひらいてみれば、聖歌が、軍歌が、戀歌が、かたっぱしからうらがえしにされ、社會の恥部が、臆面もない調子でうたわれている。それはそうとしても、しかし、表現主義が當時の市民社會の意識の、オオソドクスとはいえぬにしろもっとも尖鋭な表現だったという事情のために、表現主義文學との文學的對決、そののパロディは、もっとも有効な、市民社會との對決、そののパロディでもありえたにちがいない。こう考えてくるならば、かれが表現主義者だったかいないかなどという問いの問いかたは、まとはずれなことがわかるだろう。とはいえ、ぼくは、ブレヒトが表現主義に反感のみをいだいていた、と考えるわけではない、共感もむろんあったろう。ただ、その共感はひどくシニカルだ。たとえば、

非社會的人間と自己との同一化は、表現主義の顯著な特性のひとつだから、表現主義へのブレヒトの關係は、あるていど、ブレヒトの非社會的人間への關係に反映するはずだ、と考えてみるならば、ブレヒトにあっては、たんに非社會的人間への共感があるのとどまらず（共感そのものはきわめてあたたかい）、その共感そのものの無責任なありかたが、さらに共感されている人間の無責任なありかたまでが、具體的な發言や行動の記録をつうじて、容赦なく曝露されている、ということは興味ふかい。このことは、このような存在を恥部のように隨伴して「安定」している市民社會への批判ともなると同時に、このような存在を一面的に觀念化し理想化している表現主義への諷刺ともなる。市民社會を揶揄し、同時に市民社會の末期症狀を意識に反映する表現主義を揶揄するのに、これはじつに有効な方法だと考えていい。いわば敵の舞臺に進出し、敵の小道具を逆用して、ロマンティックな悲劇を無責任の喜劇に轉換するのだ。むろん、この仕事はしばしば危険をとまなう、ともいえる、あるていど敵の病菌におかされることが避けがたいから。しかし、むしろ逆に、すでにあるていど病菌におかされているばあいは、むしろこの仕事こそ恢復への積極的な歩みとなりうるのではないか。ブレヒトのばあいには、ばくはそういう積極的な意味があったと考える。ともあれ、初期の詩にみられる、市民社會への否定のなかにまじる同意、曝露のなかにまじる愛情、この獨特な交錯は、たしかに魅力的である。それはかれのいわゆる「矛盾する精神」の動力學のあらわれだった。だが、ある意味でそれは、かれの詩の弱點をもなす。なぜならここではまだ、未來のためになにをえらびとり、なにを棄てるべきかが、故意にはぐらかされているから。C・D・ルウイスも指摘しているように、諷刺の矢をはなつての攻撃は、こちらがわの世界觀の據點が確たるものでないかぎり、敵に致命傷を負わせることができない。だからE・フィシャーも、ブレヒトの初期の詩の抗しがたい魅力にもかかわらず、現在、こう評價する——「初期の詩は、その非妥協性・挑戰的な反逆精神によって、きわめて魅惑的だ。だがこんにちでは、ブルジョア世界の徹底的な否認も、それが個人的な孤立したものにとどまって、なんらかの社會的な結果をよびおこさぬかぎり、ブルジョアに容認される。かれの詩の、

憂愁をひめた攻撃性・優雅な不作法・華麗な挑発の調子は、ブルジョアをびっくりさせるが、怖れさせるよりはたのしませてしまう。」だが、言うまでもなくブレヒト自身が、ここに指摘された弱點を拂拭していったことは、後年のかれの詩を讀めばあきらかである。コミニズムという確たる據點に立つて以後、かれのはなつするとい諷刺の矢のまとは、はっきりと顔があった。

ほくは、ブレヒトが初期からすでに、具體的な狀況をとらえて有効に利用していた、と言いたいたために、問題を表現主義とのかかわりという面にしほりすぎたかもしれぬ。むろん、その面は多くの面のうちのひとつにすぎない。ともかくこの面を文體の空間に投影すれば、たとえばありふれた色彩語の多用という事實が對應する。對應する事實はまだあるだろう。だが、ブレヒトの文體は、表現主義とかかわる部分のほかに、じつに多様な部分をふくんでいる。

この文體は、たとえばL・フォイヒトヴァンガアに言わせるならば、まさに「ブレヒトのことば」であり、それをつうじて「ドイツ語はこんにち、ブレヒトが詩作するまでは表現しえなかった思想や感覺を、表現できるようになった」という。文體の問題などは、ほくのような異國人にわかるはずはないが、避けてとおるわけにもゆかない。文體の創造は、詩人の根本的な問題のひとつである。ことに、いわゆる詩的な詩人たちはことなり、具體的な眞理（「眞理は具體的だ」とブレヒトは亡命さきの小屋の壁にきざんでいた）を、ひとびとの有効な武器となりうるように、えがきだそうとする詩人にとっては、在來の文體はある時期にはそのままではまったくやくにたたぬ。いってみれば、この困難が、ある意味でブレヒトをブレヒトにしたのだ。フォイヒトヴァンガアは語っている——「きわめてすぐれた結果を生んだ、ブレヒトの果敢な實驗は、かれが必要とする言語をつくりだす實驗だった。かれの言語は民衆的でなければならなかったが、低俗だったりふるめかしかったりしてはならなかった。あたらしいなければならなかったが、わざとらしくてはならなかった。かってルタアは民衆の口邊を見て、民衆の話しことばをとって用いること

ができたが、ブレヒトが眼のまえに見いだした民衆の日常語は、ほとんど詩人には用をなさず、劇作家にはまるで使えないようなしろものだった。同時代の詩人たちも、ほとんどかれに教えるところがなかった。ハウプトマンの自然主義的なことはブレヒトの肌にあわなかったし、ゲオルゲやリルケの民衆からとおいことばはかれとまったく縁がなかった。ときどきかれは歎いた、『ホラティウスが平凡な思想や陳腐な感情を表現すると、作品はすばらしい。それはかれが大理石で仕事したからだ。現代のぼくらは泥で仕事している』と。しかしかれが泥をこねあげた結果は、じつに新鮮な、ドイツ文学史においてほとんど比類をみない、日常語による詩のみごとな達成となった。この言語は民衆的であって個性的であり、嘲笑的であって抒情的であり、具體的であって暗示的である。ところでE・ボエヌマンがこの言語をふたたびもとの泥に分析することをころみているから、その分析結果を借用しよう。ボエヌマンによれば、ここには四種の、完全に種類をことにする要素がみいだされる。a、南ドイツの日常語。b、メタフォアに敵対的なまでに具體的なイメエジ。c、官庁語。d、外國語（ことに英語）の語法の轉用、およびエキゾチックな語の混入。まずちょっと註釋をくわえておくと、bの具體的なイメエジという要素は、とくに注意されている。ブレヒトは生涯をつうじてほとんどメタフォアを使わなかった。かれに言わせると、詩は「眞實」を記録するものでなければならず、しかもそれは讀者によって有効にやくだたせられねばならない。やくにたつ眞實、いいかえれば、それにもとづいて讀者が思考し行動できる眞實とは、具體的でなければならず、理性にてらしたものでなければならぬ。たとえば伊勢灣颱風について報告を書く科學者は、こんごの災害が具體的に最少限にとどまりうるように、その報告をもととしてひとが思考し行動できるように、具體的に書かねばならないが、ブレヒトによれば、おなじことが、情緒の平面において、詩人にももとめられる。文學が情緒の組織手段であるとすれば、詩もまた、情緒を有効な認識の方向へディアレクティクに組織してゆく手段でなければならぬ。むろん、考えがこまでくれば、たんに詩のイメエジが具體的であるだけではたりないことも、了解されよう。後年のブレヒトは、この線ではるかに前進する

が、初期においてもすでに、メタフォアの排除という點で、印象主義や表現主義とはっきり斷絶している。cの官廳語は、主としてパロディイとしてあらわれる。ここには、だから、聖書や格言や先行文學のパロディイをもふくめて考えていいだろう。ただそのばあい、官廳語には、いわば興奮をおこさせ、酔いをうばいとするような、積極的な意味あいの用法もあることを、注意しておかねばならぬ。dは、おもいがけぬ適切な表現を生むことがあるが、なにより、補助手段として、作品と讀者とのあいだに空間をつくりだすことにやくだつ。そして空間は、作品との對話を讀者に可能にさせる（あまりにも感情移入を強要する種類の作品と對比して考えてみるといい）。ところで、このような諸要素からなる言語が人工的であるのはたしかだが、なによりだいじなことは、できあがつた作品がきわめて民衆的な感じをあたえることである。ブレヒトのことは秘密、文體の秘密は、もしときほぐせるとしたら、おそらくここにある。民衆的なことばの詩を書くということは、たんに日常のやさしいことばで書くとか、俗語をはめこんで書くとか、いうだけのことは、まるでちがう。不正確な言いかたを許してもらうなら、たとえばベンのカクマがあくまで個性のひびきをつたえるのにたいして、ブレヒトのカクマは、現實のデアレクティック（そしてそれこそ民衆のデアレクティックでなければならぬ）そのものと化することを志向しているのだ。たんに個人的な抒情をこころざす詩人にとってより、あえていうなら社會的な抒情をこころざす詩人にとってこそ、文體の問題、さらに擴大していえば形式の問題は、けつしてゆるがせにできぬ問題なのである。もちろん、しかしこの問題は、サルトルが逆から證明しているように、それだけを切りはなして考えることに眼をうばわれるならば、なんの意味もない。形式の問題は、狀況のなかに、つまりひとつひとつの詩を、その條件におうじ目的におうじて書きあげてゆく、具體的な過程のなかに、有機的に存在するほかはないものだ。いまのぼくには、これをうまく語るちからはない。ただ、いちばん見やすいことに限定して、形式のことにちよつとここで觸れておくなら、「説教書」の詩はことごとくバラッドであり、しかもうたいうるように書かれている（いくつかにはブレヒト自身が譜をつけている）。この性質は、のちの作品にもうけつが

れ、發展させられてゆくが、このことにもペンに代表される「純粹」な詩人たちとの違いがあきらかに見られよう。「説教書」出版の年に、ブレヒトは書いている——「末期の印象主義・表現主義は、きれいなイメエジや芳香性の語からなる詩を生産した。そのなかにはうまくいった詩も少しはある、うたうこともできず、ひとびとを強化するために手渡すこともできないが、それでもともかくなにかの、といったものが。しかし、このわずかな例外を除けば、かかる『純粹』詩は買いかぶられている。純粹な詩というやつは、思想とかひとにも有益な感情とかを傳達する根本的な行動から、あきらかにあまりにもとおざかっている。偉大な詩はすべて記録の價值をもつ。」

ぼくは「説教書」の内容にはふれなかった。じつに素材にうつくしい詩があることも故意に無視した。原書を一讀していただければすむことだから、これはゆるしていただけたと思う。しかし、問題を主として方法にしぼって見たかったものの、それも十分にできなかったことは、ゆううつだ。ともかく、ぼくが考えていたことは、「説教書」は、のちのブレヒトの段階からみれば、まだ「眞實」を認識する「智慧」（辯證法的唯物論）において、不明確であるとはいえ、一九二七年のドイツの状況においては、有効であり、おそらくブレヒト自身もその状況における効用性を意識していた、ということである。そして、いわゆる相對的安定期にあるいまの日本の（ことに中間層の）情緒の組織状況を、當時のドイツのそれとどこか似ている、と想像してもそうけんとうちがいではないとすれば、「説教書」の方法は、ぼくたちにも有効なところがあるにちがいない。むしろこれはぼくの想像にすぎないが、ぼくとしては、この試論を書いたのは、この想像の基礎をいくらかでも明瞭にしてみたからである。しかし、そう想像するからには、なにより實驗してみなくてはならない。方法を具體的に檢證するのは實驗なのだ。これはそうかんたんにはゆかぬ。たとえばブレヒトが詩形としてもちこんだ聖歌・軍歌・戀歌は、日本のばあいにはほとんど七―五調の型紙いまいに歸してしまふ。ともあれ、ぼくはこころみに一篇を譯した。むしろ「説教書」は「徹底的に翻譯不

可能」(E・フィシャー)であり、譯は原詩にはるかに劣る。劣るだけでなく、型紙(たとえば流行歌の形式)をつかえなかったことにおいて、表現主義のような明確な(文學上の)對立物を見てないことにおいて、パロディイのたいをなさぬ。だがよくにしても、ブレヒトにならない、これをいまの「家庭」におくる「説教」とする意圖をもちつつ、譯してみはした。このような實驗が有効でありうるかについて、できれば批判をいただきたい。

#### かれとかれらのバラッド

かれを、どこかの男が月をかぞえて

ぼうきで搔きだしたとき、かれはすでに

はでにわあわあわめいた、女から出て。

みたところはあかく、みじめに、ちっぽけに。

かれらは待ってた。布きれを用意して。

そしてサイレンを鳴らして挨拶した。

さて、すぐ感動の涙をこぼして

ともかくもかれの肌からくそを拭いた。

そのときからかれらはかれに親切だ。

かれはかれらの子、かれはかれらのおっと。

かれが見えぬとなると、かれらは不幸だ、

涙はびしょびしょと、ああ洪水のもとノ  
しかし晴朗だ、かれが食うのをみれば、  
みな感激してかれのくそをもくらう。

そうだ、たとえばかれの犬がくたばれば  
かれらはのこらず泣いて喪服をまとう。

かれらはことばをかれのくちにおしこむ、  
齒と舌とのうごかしかたをまねさせる、

青イオウム赤イオウム白イオウム

オウムハ味ヨクタベラレル、タベラレル。

かれがもし固有名詞を氣にするなら

かれらは叱る、それじゃ大衆なみだと、

そして教える、かれの齒なみはいまから

かれらの齒なみとげんみつにおなじだと。

かれらはかれのゆめのなかへ腰をすえ

はねをのぼす、のぼすはのびるに通ずる、

が、かれの零落はかれらのそのゆえ、

だれがたらふく食つてゐるぞとあてこする？

むろん奉呈する、焼けぶとりのいもを。

かれが食えば、なんでかれらが席を立つ？

いつでもそばに置く、くそまじめな顔を、

みたまえ敬虔に、べんじょのまえで待つ、

かれににんげんてきに接近しようと

かれらはその姪をかれに周旋する、

ふたりにのりとのことばをふりかけると

かれは民主的にかのじょにおんぶする。

微笑して星辰の位置をさししめし

かれらはかれの安息を祝福する、

そしてテレビライトでかれを照らしだし

電波でかれのおことばを追跡する。

とはいえ、かれらはべつに怪物じゃなく

かれだ、いつも温厚でわけじゃない。

あかいきれにはいらだつ、机をたたく、

ときにヘリコプタアは行くえを知らない。

むろん、かれには慈愛のこいびとがあり

古着のやまに愛の十字をぬいとる、

やがてこいびとはいつか牝牛と變り

絞首臺のえさのために乳をしぼる。

もちろん、石を投げればかれらは騒ぐ、

なんてこと／　だって誠實で、清潔だ、

かれは、こいびとが保證するまでもなく。

まったくずいきするほかない性質だ、

かれがすえながく生きのびることをだけ

私財あつて私心なきかれらはねがう。

が、かれは不安だ。石はあす、岩にばけ

たぶんあさつてあたり苔がむしちまう／

かくて、しんからかれが恐怖するときに

恐怖もかれらの恐怖でしかなかった。

だってかれらはうまい／　かれからたくみに

皮を剥ぎ、かわりにきものをあてがった／

かれが歩くか？　いや、きものばかりがゆれ、

白晝なら、どろぼうのようにしのびあし／

あきみら、かれをあわれんでやとくれ、

かれはいっそくたばるほうがよほどまし。